

人という名の「ちから」

福島県福島市立渡利中学校

三年 大滝 広子

「ちから」。

それは、人が困難にぶつかった時の、大きな原動力。私のこれまでの人生において、そんな「ちから」をくれた、二つの出来事を紹介します。

一つ目の出来事は、私が小学二年生だった秋のことです。休み時間、座ろうとして、鉄棒に足をかけ…。気づくと、右腕の激しい痛みに襲われていました。落ちると感じた瞬間、無意識に地面についた私の右腕は、ばんばんに腫れていたのです。それから、病院へ行き、とんできた母も、お医者さんも驚きの右肘の粉碎骨折という診断。入院するまで、何時間とかかりませんでした。そろばん、ピアノと、主に右手を使う習い事をしていた私にとって、右腕の骨折は、ショックングなものでした。まさか、私が入院することになるなんて。この先、どうなるんだらう。自分のことながら、どこか他人事のように、でも確実に、不安は積もっていききました。

ところが、入院してまもなく、私の不安は、徐々に安心に変わっていったのです。きっかけは、看護師さんによる、絵本の読み聞かせ。その穏やかな声に安心を覚えるようになった頃、周りの優しい声に気づき始めました。お医者さんの明るい口調。家族

からの応援。母は、できるだけ長い時間そばにいてくれましたし、姉だって、妹に母を横取りされていくようで寂しい思いをしても、私に怒ることはありませんでした。また、クラスの友達が書いてくれた励ましの手紙を病室まで届け、たくさんのお話をしてくださった担任の先生。習い事の先生からも、メッセージをいただきました。このようなみんなの支えが、私の入院生活にとって、大きな「ちから」となったのです。

二つ目に紹介するのは、中学生になってからの出来事です。私は、特設科学部という部活動に所属しています。科学部では、平日のみならず、実にさまざまな時を過ごしてきました。中でも印象に残っているのは、昨年開催された、科学の全国大会での研究発表と、その練習期間です。先生から、全国大会出場の話聞き、いまひとつ実感がわかないまま、早速、発表に使うためのポスター作成が始まりました。そして、発表練習を通した反省点を、部員どうしで、幾度となく話し合う中で、全国大会という舞台が、いかに大きいものか知ったのです。指導をいただき、壁にぶつかれば、部員五人で泣きながらも克服し、よりよい発表を目指しては、五人でひたすら考えながら、本番までの二カ月間を駆け抜けました。

迎えた当日。普段とは違う環境に、私は、発表する内容を忘れてしまいそうなほど、緊張していました。しかし、部員たちが周りで発表している姿を見ると、自然と落ち着き、声が出てきました。今振り返ってみても、練習以上に、自信を持った発表だったと思います。必ずしも満足のいく結果ではなかったものの、だからこそ、自分たちの研究を精一杯発表できた経験が、私にとってかけがえのない糧になったことは、間違いありません。このように、私

が在籍する科学部には、互いに協力しあい、数々の課題に臨んできた仲間がいます。そんな仲間が、発表練習に懸命に取り組んだ日々から、科学部員としての役割を終えつつある今もずっと、私の「ちから」となる存在なのです。

この二つの出来事には、共通点があります。まず、困難や課題に対して、私が最初に抱いた、ネガティブな気持ち。そして、そんな、暗い思いから救ってくれた周囲の人からの「ちから」。たくさんの人々が、意識的ではなくとも、私の「ちから」となって支えてくれました。例えば、骨折という大きな不安に安心をくれた家族や友人。例えば、全国大会への緊張を、共に乗り越えた科学部の仲間たち。それはそれは心強い、「ちから」となりました。

また、人々がもたらしたのは、「ちから」だけではなくありません。骨折の入院生活は、私の将来の夢を、医療系の道へと進めるきっかけとなりました。科学部の部員たちは、よき友人として、居心地のよい関係を築いています。失敗を恐れ、課題に対して、決して主体的ではなかった私にとって、「ちから」をくれる出来事は、人生の分岐点です。

私は、これからも、自らの意思で、冒険に挑戦しようと思わないでしょう。しかし、人とのふれあいによって、高い壁も、いや、日常生活でさえも、「ちから」に支えられるなら、自分が歩みだした方向に、恐れるものはないのです。

「ちから」。

それは、人が困難にぶつかった時の、大きな原動力。そして、人が人へおくる、頑張る心を支える、ささやかな魔法。